

VU (絶滅危惧Ⅱ類)

コウノトリ目 サギ科

ミゾゴイ

Gorsachius goisagi (Temminck, 1835)

英名: Japanese night heron

カテゴリー判定基準: A-2

旧レッドリストカテゴリー		
1991	1998	2007
R	NT	EN

ミゾゴイは、基本的に日本の本州、九州、四国および周辺島嶼の温帯域でのみ繁殖する渡り鳥で、非繁殖期にはフィリピンを中心とした東南アジアで越冬する。1960年代以降、個体数が激減しており、越冬地の森林減少、繁殖地での捕食者の増加、都市近郊林における繁殖適地の減少などが原因と考えられている。都市近郊林ではハシブトガラスやオオタカが、伊豆諸島では外来種のイタチが、捕食者となっていると考えられる。

Gorsachius goisagi is a heron with brown plumage and a relatively short beak. This heron breeds only in temperate Japan except for a few cases, and winters in Southeast Asia, especially in the Philippines. It prefers to breed in lowland broad-leaved forests and mainly forages on soil animals such as earthworms, land snails, small insects and freshwater crabs. This species has decreased in number since the 1960s, which suffers from habitat loss in wintering and breeding areas and increase of predators such as crows and non-indigenous weasels.

基礎情報

■形態 全長約50cm、翼長約25~30cm、尾長約9~12cm。体の上面は赤褐色で、腹側はクリーム色に黒色の縦斑が入る。若鳥では、体の上面が暗褐色で、全体に黒い小班が入る。他のサギ類に比べて、嘴が短い。近縁のズグロミゾゴイでは、成鳥では頭部に黒い冠羽があり、また初列風切羽と小翼羽、大雨覆の先端に明瞭な白斑があるが、ミゾゴイでは冠羽がなく、白斑部が比較的小さく余り目立たない。

■分布域 本州、九州、四国、伊豆諸島など、基本的に日本の温帯域でのみ繁殖するが、台湾及び済州島でも各1例ずつ繁殖記録がある。沖縄や台湾、中国南部、フィリピンなどで越冬する。サハリンやパラオ諸島からの記録もある。北海道でも観察記録はあるが、繁殖は確認されていない。

■生息環境 標高1,000m以下の平地から低山の広葉樹林および針広混交林で繁殖している。営巣にはケヤキやコナラ、サクラなどの広葉樹

を利用することが多く、巣の下に広く空間が維持されている場所を好む。過去には、営巣には針葉樹を好むとされる文献もあったが、最近は針葉樹での営巣例は少ない。開けた農耕地や民家の庭で採食することもある。

■生活史 渡りが早い個体は3月後半から繁殖地で観察されるようになるが、渡りの中継地と考えられる場所では6月頃まで散発的に記録されるため、個体により移動時期に差があると考えられる。繁殖地に飛來した個体は、営巣地近辺で数日から1週間ほど夜間に鳴き、造巣、産卵を行い、順調なら約2ヶ月程度で雛が巣立つ。巣は地上高5~15mほどの枝に作り、3~5卵を産む。9月から11月頃に越冬地に移動する。夜行性と記述されることもあるが、繁殖地での採食や給餌は基本的に日中に行う。ミミズやサワガニ、陸産貝類、地上性昆虫などを主な食物としている。

現在の生息状況

■分布域の現況 分布域の各地で繁殖しているが、その密度は以前に比べて低下している。山

梨県の久那土や伊豆諸島では、1970年以前には多数の繁殖記録があったが、最近はほとんど記録されなくなっている。

■生息地の現況 ミゾゴイは広葉樹林を好み、人工植林地はあまり営巣に利用しない。国内では、過去50年ほどの間に、人工植林地面積が増加し、広葉樹林面積は減少傾向にあることから、ミゾゴイの潜在的な繁殖地が減少していると考えられる。

■個体数の現況 ミゾゴイの個体数は不明だが、日本各地で観察記録が少なくなっていることから、全国的に個体数が減少していると考えられる。保護収容個体数が1960年代以後に継続的に減少していることからも、過去50年ほどの間に激減していると考えられている。現在は、急激な減少傾向は落ち着いてきていると考えられるが、まだ減少に歯止めがかかったわけではない。個体数1,000羽以下とされることがあるが、これは定量的な調査に基づくものではない。野外での観察状況を考えるとこれは過小評価になっていると考えられる。

存続を脅かす要因

ミゾゴイが減少した時期は、他の夏鳥が減少した時期と重なっており、越冬地における森林面積の減少が個体数減少の主要因の可能性がある(11)。ミゾゴイの主な越冬地であるフィリピンの森林率も、1950年頃には約50%程度だったが、1990年頃には約20%になっている。ミゾゴイが営巣を利用する低山は、開発の影響を受けやすいため、営巣地の減少も問題となっている(11)。都市近郊では、ハシブトガラスやオオタカの捕食により、繁殖成功の低下や死亡率の上昇が生じている可能性がある(52-4)。三

宅島などでは、ネズミ害防除のために移入されたイタチによる捕食が、減少要因の一つと考えられる(52-3)。

保護対策の現状

大規模開発事業用地においてミゾゴイの営巣が見つかった場合には、その生息に配慮した保全対策が行われるようになってきている。横浜市の動物園では、飼育下繁殖技術の確立を目指してミゾゴイの傷病個体の飼育を行っている。

特記事項

基本的に日本国内でのみ繁殖する種であり、その生息状況は世界的に注目されている。なお、日本鳥類目録改訂第7版(日本鳥学会 2012)において本種の分類はペリカン目に変更されているが、本書では先に公表された第4次レッドリストとの対応を図るために第6版に準拠した。

参考文献

- BirdLife International, 2001. Threatened birds of Asia: The BirdLife International Red Data Book Part A. BirdLife International, Cambridge. 1516pp.
- 日向富士雄, 1949. ミゾゴイの観察. 野鳥, 14(9): 19-22.
- 石川正道・浜口寛・小西恭子・藤田一作・大鹿裕幸・川上和人, 2012. 愛知県西三河地域におけるミゾゴイ *Gorsachius goisagi* の営巣樹種と立地環境. 日本鳥学会誌, 61: 289-295.
- 川口孫治郎, 1937. 日本鳥類生態学資料. 巢林書房, 東京.
- 川上和人, 2010. ミゾゴイ. 日本野生生物保護学会(編), 野生動物保護の辞典, pp. 511-513. 朝倉書店, 東京.
- Kawakami, K. and H. Higuchi, 2003. Population trend estimation of three threatened bird species in Japanese rural forests: the Japanese Night Heron *Gorsachius goisagi*, Goshawk *Accipiter gentilis* and Grey-faced Buzzard *Butastur indicus*. J. Yamashina Inst. Ornithol., 35: 19-29.
- Kawakami, K., H. Uchida and M. Fujita, 2005. Diet of the Japanese Night Heron *Gorsachius goisagi* in Japan. Ornithological Science, 4: 173-177.
- 川名国男, 2010. ミゾゴイの繁殖期における雛への給餌活動. 山階鳥類学雑誌, 41: 207-211.
- 川名国男, 2012. ミゾゴイ~その生態と習性~. ジャパンプリント, 東京.
- 野村博, 2008. 辰巳ダムにおけるミゾゴイ営巣調査. ダム技術, (260): 56-63.

執筆者: 川上和人(森林総合研究所)